

## 風とアサギマダラの生活

アサギマダラに限らず命あるものを語るとき、『風』を考慮に入れない論理は意味のないものだと思う。なぜならば、風がなければ生命は存在しなかったし、ビッグバンに始まる宇宙も存在しなかったからである。

風のない地球を想像してみよう。『風の博物誌』の序文に、著者のライアル・ワトソンは書いている。

『風がなければ地球の大部分は誰も住めない場所になってしまう。熱帯地方は生きものが何も棲息できないほど暑くなり、残りの地球は逆に凍り付いてしまう。湿気は海だけに封じ込められ、細い温帯沿いに位置する大きな陸地の周縁部、すなわち沿海地帯以外はすべて砂漠と化す。腐食作用も起こらなければ土壌と呼べるものもなく、たとえばこうした過酷な条件にもめげず進化した生物共同体があったとしても、それはみずからの廃棄物で窒息してしまう運命にある。ところが風のおかげで、地球は真に生きた存在たりえている。』

私がアサギマダラの生態に興味を持ち、マーキング調査に参加するようになったのは1996年である。その頃、秋の合同マーキング会は和歌山県の日高町西山と日御碕灯台とで一泊二日で行われていたが、宿泊は白浜温泉郷にある故・山本博子さんの別荘を使わせていただく慣わしになっていた。夕餉は鍋を囲み、盛大な宴会となり、アサギマダラ談義を肴にして大声で歓談するのが常であった。

その歓談でのごことであるが、新米の私が『アサギマダラは風に飛ばされて生きているのではないか』と言ったところ、その場にいた全員からの集中攻撃に遭ってほとんど吊るし上げ状態になったことがある。そして『アサギマダラはね、自分の意思で堂々と飛ぶんですよ。疲れたらね、片一方の翅で海に浮かんでね。もう一方の翅をまるでヨットの帆のように使って目的地に向かうんですよ・・・』と、諭されたのである。その日から風に対する私の関心は一層強まることになったように思う。

今、一番気になっている風は斜面上昇風である。日が昇るとまず傾斜地の、比熱の小さな地面が暖められ、その熱は地面に接する空気に伝導して気温が上がり、空気は軽く

なるのであるが、隣接する山側の地面でも同じことが起こるため、斜面全体の地面に接する空気が絨毯状になって稜線まで吹きあがる斜面上昇風になるのである。この風が森の中で生活するアサギマダラにとって一番なじみの深い風であり、有益な風である。例えば初夏の頃、山麓の気温が上がって25℃ぐらいになるとアサギマダラは山麓から姿を消し、1000m前後のびわ湖バレイの稜線で見られるようになる。アサギマダラが自力で飛行して登山しているわけではなく、稜線近くの森の中で観察していると両方の翅を水平に開いたままの姿でふわっと噴きあがってくるのである。

70歳前後の数年間、毎年梅雨明けから8月初めにかけて白山や北アルプス北部の深い3000mクラスの山に、3泊4日の行程で登山するのを慣わしとしていた時期があるが、多くの山でアサギマダラと出会っている。私たちは山麓まで車でやってきて、一日がかりで登るわけであるがよくまあこんな高いところまで苦労して上がってくるもんだと感心させられたものである。しかし、斜面上昇風の存在と棲息適温を知ったとき初めて合点がいった。アサギマダラはコストを掛けずに斜面上昇風に乗って3000mの高峰にも登れるし、快適な温度環境で着地し、高山植物のお花畑で吸蜜していたのである。

風は人間の目には見えないが、確実に生命とともにある。そう思えたときに、生態の真実が見えてくるのではないかと思えるようになった。

では、アサギマダラはどのように風と関わって生活しているのだろうか。この秋から3年間、近場の京都西山中腹(西京区大枝西長・九社神社裏の休耕柿畑)に、フジバカマ畑を造って観察することにした。(2021.07.08)

\*『風の博物誌』(1984年、日本語版は木幡和枝訳、河出書房新社より1985年、河出文庫より1996年刊)

\*ライアル・ワトソン(Lyall Watson, 1939年4月12日 - 2008年6月25日)は南アフリカ生まれのイギリスの植物学者・動物学者・生物学者・人類学者・動物行動学者。ニューサイエンス(ニューエイジサイエンス)に類する書籍を多く上梓し、中でも『スーパーネイチャー』は世界的なベストセラーとなった。